

日本における野球球団インターンシップの現状と課題

Current conditions and issues on the baseball teaminternship in Japan

1K06B129

指導教員 主査 木村和彦先生

高橋 宏明

副査 武藤泰明先生

【緒言】

近年の日本において、大学生が在学中に就労体験をするインターンシップが盛んになってきた。その現場の1つとして野球球団が大学や企業と提携してインターンシップを実施し始めた。筆者は、早稲田大学によるMLB球団でのインターンシップに参加し人間的に成長できたと感じ、野球球団インターンシップに興味を抱いた。しかし、ある日本プロ野球球団のインターンシップに参加した友人は、「実際に働いてみてがっかりした」と語った。このことから、球団と学生との間にある課題は何かという疑問を持ち、野球球団におけるインターンシップの現状を調査しようと考えた。本研究では、日本における野球球団インターンシップの現状と課題を明らかにし、今後のあり方を考察することを目的とする。

【方法】

最初に、諸文献、資料を参考に日本のインターンシップ制度について理解を深め現状を把握した。次に、野球球団インターンシップの現状と課題を明らかにするため、インタビュー調査を行った。ウェブサイトで公開されている情報や資料だけでは現状と課題を把握するのが困難なため、埼玉西武ライオンズのインターンシップ指導担当の市川徹氏、スポーツインターンシップ仲介会社の小林亮文氏、そして野球球団インターンシップに参加したスポーツ科学部3年生A氏へのインタビュー調査で現状と課題の詳細について迫った。

【結果】

日本のプロ野球球団では、インターンシップを導入している球団が少なく普及していない。実習内容は球団間と期間で違いが見られた。球団によって、1つの業務に集中する場合と、色んな部署をまわる場合がある。期間では、半年以上に及ぶ長期インターンシップが存在し、学生の企画したイベント開催など短期間ではできないことが可能である。学生の意見を調査した結果、野球球団インターンシップは理想と現実とのギャップが大きいことが考えられる。学生がスポーツ業界に興味を示す一方、球団への就職には消極的であった。課題では、球団が学生の望む仕事内容が提供できない、インターン生を球団が選別できない、学生の積極性が足りないといったことが明らかになった。

【考察】

「理想と現実のギャップ」を解消するため、インターンシップの事前教育が必要だと考える。そのためには大学と球団が双方に理解し、学生が実習内容や球団情報を把握してインターンシップに参加することが望ましい。インターンシップを導入する球団の増加も今後の課題である。球団にはインターンシップが単なる就業体験ではなく、球団PRやファン増加に学生が貢献できるというメリットを把握し積極的に導入してもらいたい。最後に、学生には自分にあったインターンシップを選択してほしい。球団、期間で実習内容に違いがあるため、大学と球団が協力し、幅広い実習内容の提供の実現を望む。その

ためには、まず球団がインターンシップ関連の情報を積極的に公開し、学生に理解してもらうことが必要である。そして今後も継続的に球団がインターンシップを実施して実績と信頼を学生との間に築いていかなければならない。